

2026 年度（令和 8 年度）

浦和明の星女子中学校入学試験問題
(第 一 回)

国 語

(50 分)

注 意

1. 試験の開始まで問題用紙を開かないこと。
2. 問題用紙は全部で 11 ページある。試験開始と同時にページ数を確認すること。
3. 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきり書くこと。なお、解答用紙の※印欄のところは記入しないこと。
4. 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書くこと。
5. 印刷のはっきりしないところがある場合は、手をあげて係の先生にきくこと。
6. 字数制限のある場合は、句読点も一字と数えて答えること。

受験
番号

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

嘘をつかないような生き方をしている人のことを「正直だ」とか「誠実だ」と言うことがあります。ではまず、正直であるとはどういうことでしょうか。

正直であるとは絶対に嘘をつかないことだ、という答えについて考えてみましょう。絶対に嘘をつかないということは、^①どんな状況にあっても、誰に何を聞かれても、必ず、自分がそう信じていることをそのまま口にするということでしょう。ということは、本当のことを言えば周りにからかわれたり、あるいは人命が危うくなったりするような場合でも、やはりそのまま自分が信じている通りのことを言うことになります。

自分や他人を守るために必要な場合でも、思ったことをそのまま無防備に口にすることが、尊敬の念を込めて正直と呼ばれる人の生き方でしょうか。どうもそのようには思えないのではないのでしょうか。全く嘘をつくこともなく、このような状況なら嘘をついてもよいんじゃないか、という心のブレもないとなると、「X」正直」という言葉があるように、たしかに正直なのかもしれないけれど、思慮に欠けるように感じられるようです。

自分や他人を傷つけても嘘をつかずに思ったままのことを言う人は、多くの傷を負い、多くの傷を与えるでしょう。そのような痛ましい状況に対して、「X」という言い方で済ますことが適切には思えません。では、嘘をつかない方が正直であり、正直であることはガラス張りの状態になることではないのであれば、それはどういう生き方なのでしょう。

私たちは時として「あの人は正直な人だ」と、その人の立派さを認めて言うことがあります。それはどういう人のことでしょうか。

ドイツの教育哲学者であるオットー・ボルノー（一九〇三―一九九一）は、「率直」と「正直」を区別し、「率直」が「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態にある」のに対して、「正直でありうるのはつねに、自分自身に対してとらわれず自由な態度をとるか、それとも自分自身を見捨てるかという二つの可能性を自らのうちにもっているような存在だけである」と述べています。

まず、「率直」であるというのは、ごまかしや嘘がなく、自分が信じていることをそのまま言い、自分が信じていることと言っていることが一致していることです。「絶対に嘘をつかない人」として先に見たようなあり方は、この意味で「率直」だとは言えます。ボルノーによれば、このような率直さは「まだ特別な内面性を形

成し遂げる以前の状態にある」のであり、つまりは、まだ嘘をつくことのできない子どもに見られる状態です。他人に対する不信を知らず、内面を隠すことを知らない状態であり、事実として嘘をついていないとしても、「嘘はつかないぞ」という意志を自らで働かせたわけではありません。

「嘘はつかないぞ」という自発的な意志を働かせるためには、^②嘘をつく能力を身につけている必要があります。内面を隠したり、他人を騙す意図をもったりすることができる限りで、「嘘はつかないぞ」という決断もできるのです。つまり、嘘をつかないという自発的な意志を働かせるためには、自分の都合が悪くなれば嘘をつく誘惑にかられてしまったり、本当のことを言ったら周りにからかわれると分かれば嘘をついてその場をしのぐ技術をもっていたりしなければなりません。自分が信じていることを隠しておくことができなくてはならないのであり、つまり、ボルノーの言うように「特別な内面性を形成し遂げている」必要があります。単に「率直」なのではなく「正直」であるためには、社会がどういふところかある程度認識しており、ある状況に陥れば嘘へと誘惑されるような心の側面をもっていないわけにはいかないわけです。

実際「あの人は正直だ」と賞賛を込めて言われる人は、全く^③無垢な人ではなく、普通の人であればつい嘘をついてしまうような場面でも、ぐっと思いとどまってそうしない、そういう精神的な力をもっている人でしょう。嘘をつけば利益を得られ、そうなる場面、嘘をつけば不都合な状況を取り繕うことができるような場面、あるいは、嘘をつけば表面的には人間関係を維持できそうな場面で、やっぱり、嘘をつくのは止めようと思いとどまり、自分が信じていることを正直に言ったり、相手とオープンに話し合うために努力したりする人でしょう。

ボルノーの言葉に戻りましょう。正直な人は、「^④自分自身に対してとらわれず自由な態度をとるか」「自分自身を見捨てるのか」という二つの可能性の間で葛藤する存在です。このような心の葛藤を経験できるということは、正直に本当のことを言うか、嘘をついてその場をしのぐか、というジレンマに立てることだと言い換えてもよいでしょう。

しかし、なぜ、嘘をついてその場をしのぐことは「自分自身を見捨てること」であり、本当のことを言うことは「自分自身に対してとらわれず自由な態度」を取るものなのか。本書のこれまでの内容から考えてみましょう。

第二章で害説の検討をした時に、嘘をつくことは他人だけでなく自分自身も苦しめるという点を確認しました。嘘をつくと、「嘘をついた」と相手に言うことができず、また、一度嘘をつくとその嘘と^⑤辻褄の合うように嘘を重ねるしかなくなり

ます。言いかえれば、自分自身が相手にやったことや思ったことについて相手と自由に話すことができなくなり、どれほど後悔しても嘘をつく前には戻れないという苦しみがあります。つまり、成り行きに振り回され、自由を失い、自分が望むように振る舞えなくなってしまうのです。ここで、自分の気持ちを押し殺し、苦しみのなかに自分を閉じ込め、^①偽りのない人間関係を取り戻す希望も失ってしまうとすれば、ボルノーが言う「自分自身を見捨てる」ことになるでしょう。

しかし、嘘のせいで自分自身を見捨てそうになっても、私たちには「自分自身に対してとらわれず自由な態度」をもつ可能性も残されているとボルノーは述べています。友達と遊んでいたらつい楽しくなつて恋人との約束に遅れてしまった時、自分の不都合を取り繕うために何気なくついた嘘が大きな嘘になってしまい、恋人に悪いと思ってもあれは嘘だったと言えない時、自分の思っていることや自分が今日したことなどをオープンに話せる仲がどれだけ貴重であるかが身にしみるでしょう。その気持ちに忠実になるなら、どんなに謝ることになっても、あるいは呆れられることになっても、本当のことを話そうという勇気をもてるかもしれません。そして話してみたら、恋人は呆れることも、謝ることを求めることもなく、「気にしないでもいいよ」と言ってくれるかもしれません。その時には、相手はどうせ怒るだろうと決めつけていた自分の小ささに恥ずかしくなるかもしれません。自分自身に対して自由な態度をもつということは、さまざまな思い込みや恐れにとらわれずに、自分に素直に、自分らしくあることだとと言えるでしょう。

嘘をついて自分を失ってしまう可能性と自分に忠実に自分らしくある可能性の間で、葛藤できる心（内面性）をもっていることが、正直であることには必要です。正直であるために必要なのは、裏表がないことではなく、嘘をつきたくなるときにぐっと思いとどまる意志であり、嘘をついてしまった時にも本当のことを話そうとする意志を失わないことです。以上のことから興味深いことに気づかれます。正直であることは、一方で他人に対して嘘のない生き方であり、つまり、他人を傷つけたり他人の利害関心を決めつけたりすることへの抵抗があり、他人とオープンに對話することを求める生き方だと言えます。しかし同時に、正直であるとは、^②自分自身を大切にすることであり、自分らしくあることを切望することなのです。

嘘のない生き方については「正直」の他に「誠実さ」という概念もあります。ボルノーによれば、「誠実さ」は、開放性と純正さが人間にとつて自由に選ばれた目標となるところではじめて発生する。誠実さの一つの抵抗から無理やり奪い取られた、人間の自己自身に対する透徹さ（^③すきとおること）である」ということです。誠実さと

は何か、この文章を解釈しながら考えましょう。

まず、誠実さは、単に正直であるだけでなく、嘘がなく自分らしく生きることを「目標」として生きるあり方に関わっています。別の例で言えば、勇敢な人のなかにもさまざまな人がいます。ある人はごく自然に勇敢に行動します。ある人は自分が臆病であることをよく知っていて、臆病さを克服して勇敢になることを目指しています。自分の弱さをよく知る者だけが、強くなることを目標にできると言ってもよいでしょう。

正直でいたいと望み、嘘をつく誘惑を克服したり、本当のことを話したりするあり方においても、どれだけこのことに悩み、どれだけこのことを人生の重要な目標としているかには程度差があるでしょう。外面的に見てその人が勇敢か、あるいは正直かという点では同じであっても、その人の心のなかで何が起こっているかはさまざまです。誠実さは、自分のあり方に悩み、自分らしさを求めるその心の働きに対する名称だと言えるでしょう。

勇敢であることを目標にするには自分の臆病さをよく知らなければならぬように、誠実であるためには、まず、自分の不誠実さをよく知らなくてはなりません。ボルノーによれば、不誠実の精神に引き入れられることは、個人が、権威をもった集団からの期待やその集団の価値判断に順応する傾向において生じるものです。本書の議論で見てきたように、嘘をつくという実践は、例えば、本当のことを言ったら周りに変に思われるという同調圧力によって誘発されます。この嘘の誘発においては、たしかに多数派の集団が何を普通と見なすかなどの社会の価値判断に順応していると言えるでしょう。しかしこうした場合だけでなく、善意の嘘が口について出てくるといふことには、コミュニケーションの固定したパターンをなぞっているという側面がありました。この場合にも社会の期待に順応する面があります。さらに、自分の過ち（^④あやま）をごまかそうとする嘘は、どういふことをすると怒られるのか、どういふことをすると罰せられるのかという社会の状況を認識した上で、状況に対処するためにつかれるのでした。この場合にも社会の価値判断に沿った対応という面が見られます。

子どもが成長するということには、社会化され、世の中の期待や価値判断に順応していくことが含まれます。ということは、^⑤逆説的ですが、子どもが一人の人間として成長することには、自分のやっていることは自分らしくないという感覚をもつことも含まれるでしょう。自分がやっていることは結局周りに合わせているだけなのでないか、という疑問をもつ、と言い換えてもよいでしょう。

嘘をつくことは^⑦内面をもつことの実践であると同時に、本当の自分と見せかけの自分の分離を経験することであり、他人とやり取りしている自分は本当の自分ではないという感覚を育てることであります。ボルノーは「かかる順応がまだ無自覚な形で起こる場合には、まだ誠実とか不誠実の問題はまったく存在しない」と言います。成長し、社会に順応するなかで自分らしさを失っていることを自覚するとき、自分を失うことへの抵抗としての誠実さが目標として目覚めてくるのです。

(池田喬『嘘をつく』とはどういうことか 哲学から考える)より)

問1 太線部Ⅰ「偽(り)」の読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「どんな状況に()ということ」をたとえを用いて言いかえた表現を1ページ上段の本文中から十三字で抜き出し、始めの三字を答えなさい。

問3 本文中の二箇所空欄Xに共通して入る適切な語を考え、漢字二字で答えなさい。

問4 傍線部②「嘘をつく能力」とはどのようなものですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 無自覚に嘘をつくのではなく、意識的に相手をだましたり本当のことを隠したりすることができる能力。

イ 後先を考えずに嘘をつくのではなく、自分がつく嘘の効果や将来的な影響などを充分に検討できる能力。

ウ 自分中心の嘘をつくのではなく、周囲や社会状況をよりよくするために真実を隠し通すことができる能力。

エ 罪悪感を覚えながら嘘をつくのではなく、自分をもあざむけるほど堂々とした態度で嘘をつくことができる能力。

問5 傍線部③「無垢」のここでの意味を、傍線部③以前の本文中から二十七字で抜き出し、始めの五字を答えなさい。

問6 傍線部④中の「自分自身に対してとらわれず自由な態度をとる」とはどういうことですか。次の文の空欄に入る最も適切な表現を後から選び、記号で答えなさい。

予想される相手の反応が自分にとって好ましくないものであったとしても、

とすること。

ア 自己の欲求に忠実に行動しよう

イ 自分の気持ちを偽りなく表現しよう

ウ 型にはまらず気ままな自分でいよう

エ 堂々と振る舞って自己の意思を貫こう

問7 傍線部⑤「辻褄の合うように」は「() () しないように」と言い換えることができます。空欄に入る語を考え、ひらがな四字で答えなさい。

問8 傍線部⑥「逆説的」の内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが成長すると協調性が身につくというのが一般的な考えだが、一方で他者とは異なる自分らしさを打ち出すことも大切であるということ。

イ 子どもが成長すると他者を尊重する力が身につくというのが一般的な考えだが、他者の考えをうのみにせず^{ぎんみ}に吟味することも大切だということ。

ウ 子どもが成長するとはそれぞれの個性を伸ばすことだというのが一般的な考えだが、一方で自分らしさを失う感覚を得るものでもあるということ。

エ 子どもが成長するとはかけがえのない個性を伸ばすことだというのが一般的な考えだが、かけがえのない個性などというものはあり得ないということ。

問9 傍線部⑦「内面」とはどのようなものを指しますか。その内容にあたる部分を2ページ下段の本文中から二十五字で抜き出し、始めの五字を答えなさい。

問10 次は、本文を読んだ星子と明子の会話です。これを読み、後の各問いに答えなさい。

星子 「嘘をつく能力」がまるでない中で、いくら本当のことを言っても、それは「(ア)」ではあるけど「正直」ではないみたいよ。

明子 どうして？ 嘘をつかないことが「正直」でないなんてことがあるの？

星子 「正直」っていうのは、嘘をつきたくなる(イ)に負けそうな時に、(ウ)の末にそれを思いとどまることだからだよ。そして、そのように思いとどまることは「(A)」ことでもあるのだと筆者は伝えたいのだと思うな。

明子 進級して早く周りの友達と仲良くなりたいと思ってみんなに話を合わせようとしてしまう私は「(A)」ことができていないってことかな。

星子 そうかもね。でも、筆者はそのことに自ら気づくことが「(エ)」であることへの第一歩だって言っているよ。「正直」でない時があっても、そうやって「(エ)」であろうと目標をもって過ごす生き方も素敵だね。

(1) 空欄ア～エに入る最も適切な語をそれぞれ漢字二字で答えなさい。

(2) 空欄Aに入る最も適切な表現を本文中から十字で抜き出し、答えなさい。

問11 本文が収められている本の冒頭で、筆者は次に挙げる谷川俊太郎の詩「うそ」の一部を紹介しています。これを読み、後の各問いに答えなさい。

おかあさんはうそをつくなというけど／おかあさんもうそをついたことがあって／うそはくるしいと知っているから／そういうんだとおもう

I いぬだつてもしくちがきけたら／うそをつくんじやないかしら

A うそをついてもうそがばれても／ぼくはあやまらない／あやまつてすむようなうそはつかない

II だれもしらなくてもじぶんはしっているから／ぼくはうそといっしょに生きていく／どうしてもうそがつけなくなるまで／いつもほんとにあこがれながら／ぼくはなんともなんともうそをつくだろう。

(1) 傍線部I「いぬだつてもしくちがきけたら／うそをつくんじやないかしら」という表現には、「うそ」をつくために必要となるものの存在が前提となっています。その前提となっているものを、「()」を扱う能力」に続く形で漢字二字で答えなさい。

(2) 二重傍線部A・B「うそ」とありますが、次の1～4の「うそ」の例をA・Bに分けたとき、その組み合わせとして最も適切なものを後から選び、記号で答えなさい。

1 絶対安静が必要な同僚が、やり残した仕事を果たすために無理に起き上がろうとするので、実際にはまだ終わっていないが、「その仕事はもう終わつたよ」と安心させること。

2 仲良しの友人グループ全員でカラオケに行くことになったとき、本当は歌を歌うのが好きではなかったが、仲間はずれになることを恐れて「私も行きたい」と言うこと。

3 学校の漢字テストで不合格の点数を取ってしまったにもかかわらず、本当の点数を知らせれば母親に叱られると思って「無事に合格できた」と報告すること。

4 友人と待ち合わせをしていた日に寝坊して大幅に遅れてしまったが、いい加減な人間だと思われたくなかったので、「電車が遅れていたから」と言ってその場をしのぐこと。

ア A : 1
B : 2・3・4

イ A : 1・2・3
B : 4

ウ A : 1・3
B : 2・4

エ A : 2・4
B : 1・3

(3) 傍線部Ⅱ「ぼくはうそといっしょに生きていく」を本文の筆者の意図にそって説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア うそをつき続けるうちにだんだん周りからの信頼を失い、もはや相手にされなくなってしまう。そのような中で、もう一度周囲の人たちの信頼を取り戻すことを目標にしながらも、長い間の習性を変えるのは難しいので、せめてこれ以上うそをつく回数を増やさないようにしたい。

イ うそをつかない正直な自分でいたいと思っではいるが、自分の思ったことをそのまま口にするとうまく相手と傷つけたり怒らせたりしてしまう。これでは社会に順応して生きていくことはできないので、これからもうそと上手につきあうことで、周囲の状況に合わせてられるようにしたい。

ウ うそがばれないように次々とうそを重ねるうちに、とうとう最後にはうそがばれてどうにもごまかせなくなり、それ以上うそがつけなくなってしまう。そうやってうそを重ねるしかない毎日を過ごしながら、いつかはうそをつけなくなる日が来ると信じて過ごしていきたい。

エ 社会を渡っていく中でうそをつくことを暗に求められたり、うそをつかないと生きづらくなったりすることがある。そのような状況が変わらない限り、うそをつくことはなかなか避けられないが、それでも偽りのない生き方を目指す気持ちを忘れないことを大切にしたい。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

小学四年生になったばかりの小林睦実（ムツ）は、両親と父方の祖父、高校生の兄二人とともに集落の中で暮らしている。家の裏庭で飼っている九羽のにわとりの中で、他のにわとりからつき回されて弱っている一羽に、ムツは「飛鳥」と名前をつけて気にかけている。次は、学年全体で二十数人しかいない学校に通うムツが級友の佐紀と共に登校している場面である。

「由美、きょう学校来るかな」

佐紀がそんなことを言ったのは、ムツがけった小石がそれで側溝に入ってしまったときだった。ぼちゃ、と音がしたあとで「また休みだった」と、佐紀が言う。

「この前も休んだとき、何日か続いたよね」

ムツが言っても、佐紀は顔をあげない。足元にまだ小石があるかのようにうつむきながら歩いている。

ムツはきのうの朝の会で、四年生の担任になった工藤先生が「じんましんが出たみたいですねー」と言っていたのを思い出した。なんでもないこと、というような言い方が、むしろ症状の深刻さをあらわしているようで、ムツは心配になったのだ。

由美とは、住む集落こそちがうけれど家同士が近いので、休日にかを来して遊ぶ仲である。特になにをするでもないのだが、ムツは由美と過ごす時間が好きだった。母さん同士も仲がよくて、いつだったかの立ち話で「そのうち治ればいいんだけどねー。こればかりはほんと、しつこいから」と、由美のお母さんがまゆを **a** の字にしていたのをムツはよく覚えている。

「今回はどうなんだろう、じんましん」と、佐紀は言った。「やっぱりひどいかな」暗い顔のまま、弱々しいため息をつく。由美のことが心配なのもあるのだろうが、佐紀がこんな顔になっているのにはもうひとつ理由がある、ムツはそのことをよくわかっていた。でも、佐紀はそのことについて、決してふれようとはしない。

「きょう四時間目、体育だもんね」

ムツが小さな声で言うと、佐紀はぱつと顔をあげた。ちよつとふみこみすぎたかもしれない、とムツは構える。でも佐紀は、

「ね。きょうもペアで練習とかあるよね、きつと」と、答えた。「綾子に言われたら、ムツとペア、なれないかも」

「うん。どっかにいれてもらうから、だいじようぶ」

ムツが言うと、それでその話は終わりになる。ふたりとも無理に別の話題を探して、さっきのことなどなかったかのようにふるまう。前を歩いていく赤や黒のランドセルをながめながら、笑顔でぜんぜんちがう話をする。

でも、ほんとうはもつと——本音を言えるのであれば、ふたりとも——綾子のことを話したい。

四年生の女子のなかでいちばん背が高く、運動が得意で、声の大きい綾子。高い目線からみんなを見下ろして、ずばりとものを言つてのける綾子。体育のときは、無理にでも由美とペアを組みたがるのに、「なぜ由美にじんましんが出るか」などということとはちとも考えようとしない綾子。

そして由美が——だれにでも優しくして、だれの悪口も言わない、明るくてひと好きのする由美が——じんましんで学校を休むときは、決まって佐紀とペアになろうとする綾子。佐紀といつもペアを組んでいるムツが、そのときにあまりものになつてしまうことなどは、気にもとめない綾子。

ほんとうはそういうあれこれを、おちまけてしまいたい。でも言えない。佐紀がそういったことを綾子の耳にいれてしまうかもしれないし、その反対にムツもほかの子にそういうことを話してしまうかもしれない、歩調をあわせて歩いているふたりは、心のすみっこでそんなことも考えている。

おたがいを嫌いなわけではない。絶対に告げ口をされる、と思っているわけでもない。でも、おたがいのためにそういうことは言わないほうがいいと思っている。

綾子はうまいのだ。ささいな変化を見分けることも、その変化の理由をつきとめることも、それを利用して自分の味方をふやしていくことも。おとなが思うより、ずつとうまい。

〈中略1〉

言いたいことをだれにも言えないのと、言いたいことを言っているのにだれにも聞いてもらえないの、どちらが悲しいだろう。ムツはじいちゃんの細い背中をながめながら、そんなことをぼんやりと考える。

「ねえ、じいちゃん」

これで三度目だ。でも、返事はない。

「じいちゃんってば」

ムツはさつきよりも少しだけ声を張る。それでもじいちゃんは、雨の伝う窓ガラスをぼんやりとながめたまま、ふり返ることはない。ムツは、悲しくなる。じいちゃんは耳が遠くて、ただムツの声が届いていないだけだとわかつているのだけれど、悲しみは心に勝手にうかんで、ガラスにあたる雨のように心をつるりとすべつて消えていく。

ムツは声を出すのをやめて、じいちゃんのほうへ近づいた。けさの雲は低く、外をながめてみても太陽は見えない。奥のほうは少し明るいようだけれど、家の窓からは暗い雲ばかりが見えた。

「なんで補聴器外してるの？」

ムツがじいちゃんの右耳に近づいて言うと、「ん」と、ようやく反応がある。

「エサか」と、ムツの問いには答えずきいてくるのでうなずいてみせると、じいちゃんは窓わくにおいていた補聴器を手にとった。畑仕事で焼けたじいちゃんの肌によくなじむ色の補聴器、それが慣れた手つきで左耳にかけられていく。

じいちゃんが補聴器を外しているのは、めずらしいことだった。寝るときや風呂に入るとき以外は大抵つけている。けさは、そうじでもしていたのかもしれない。そう思っけいてみると、じいちゃんは「なんも」と言っけ笑った。なんとなく、ということらしい。

いつだったかムツは、そのちっちゃな機械がずっと耳についているというのはわずらわしくないか、ときいてみたことがある。そのときじいちゃんは、ちよつと考えるように補聴器にふれてから、口の右はしをあげて、

「スイッチ切りかえられつがら、聞きてものだけ聞けるもの」と、答えたのだった。

ムツはおどろいた。補聴器をつけているときは無条件に電源をつけっぱなしにしているものとはばかり思っけいた。でも、^②そう答えたときのじいちゃんはなんだかとても得意げで、ムツは、年をとるのも悪くないかも、と思っけたのだった。

外に出ると、風がはじめていた。そのせいで雨がわずかに流れている。じいちゃんはそれを遮るようにななめに傘を持ち、ムツはエサを持つ。ふたりで小屋に入ると、にわとりたちはいつものように羽をばたつかせて、奥のほうへとにげていった。ムツはエサ箱にエサを入れつつ、あたりを見わたす。飛鳥はだいじようぶだろうかという不安が、心のなかでふくらんでいる。

「いーっ」というじいちゃんの声がして、ムツはうしろをふり返った。くちびるを左右に引っ張り、けわしい顔をしたじいちゃんの手のなかには、飛鳥がいた。

「飛鳥、だいじようぶ？」

ムツがきくと、じいちゃんは「弱ってらな」と、ひとことつぶやいた。飛鳥は地面に放たれてからも一、二歩進んだだけであまり動こうとしない。羽もまた少し抜けてしまったようだ。

「やっぱ飛鳥だけ、外に出したらだめかな」

ムツはトタンを鳴らす雨音に負けないように、大きな声で言った。「足に糸つけといたらさ、きつとにげられないし、運動もできるよ。ここ、せまいからさ、一羽へったら、ほかのにわとりたちもうれしいかもしれないし」

じいちゃんはムツの言葉を聞いて、せまい小屋のなかへ視線をめぐらせた。それから、ちよつと考えて、

「おいも、ムツぐれちつちえ時、そんなんたごと言っだな」と、笑った。

聞けば、じいちゃんも昔、にわとりを助けようとしたことがあったという。近所の友だちの家に一羽、いじめられているにわとりがいて、その友だちとふたりで協力してにがそうとした。でも、直前で友だちのお父さんに見つかり、しかられたという。

「また新しやつがやられるだけだ、つて言わいでな。お前たちおめんだ、ほかのやつがいじめられているのは良かったが、つて」

それでも弱っていたにわとりを助けたかったじいちゃんたちは、おとなの目をかいくぐってそのにわとりをにがした。近所の林のなかに、使われていないまき置き場があったから、そこにこっそり入れておいたという。

「どうなったの」と、ムツはきいた。

「三日か、四日か……、覚えてないおべでねげどな」

身じろぎもしない飛鳥のほうを見ながら、じいちゃんはぼそりと言う。

それくらい日が経ったところに、別のにわとりが小屋のなかで死んでいるのを友だちが見つけたという。流れ出た血が地面にしみて、はらわたが出て、目が白くにごっていた。

「おめんだは、助けでらんでね。選んでらだけだ、つてそいつそのとうさ、父親に言わいでな。なんも言いかえせねがった」

ムツも、なんも言えなかった。鳥肌が立っていた。もう四月も終わりで桜も散り始めているというのに、どうしてこの小屋はこんなにも寒いのだろう、じいちゃんの話聞きながら、ムツは頭のすみでそんなことを考えている。

「どうしようもねんだ」と、じいちゃんは言った。「どうしようもね」

言い終わった瞬間、それがなにかの合図だったかののように、さつきまで大人しくエサを食べていたにわとりたちが、ばさばさと羽を広げてさわぎ出した。仲間たち

に羽をぬかれた飛鳥だけは、その音さえ聞こえないかのようにじっとしている。飛鳥を見つめるじいちゃんも、なんの表情も浮かべないままじつと動かずにいた。

へ中略2 ムツが登校すると、昨日まで欠席していた由美が学校に来ていた。休んでいた間に由美の前髪は不自然なくらいに短くなっており、そのことで由美の周りには菊地綾子を中心とした女子の輪ができていた。へ

「……お母さんが失敗しちゃって」

由美は、はずかしそうに前髪を手でかくしながら言う。

「赤ちゃんみたーい」

③ 満面の笑みを浮かべながら、綾子はからかうように言葉を投げる。ほかの子たちも声こそあげないが、にやにやと笑っていた。

「ねえ、手どけてよ」

綾子が発したその声も、まだ笑っていた。「ねえ、どけてよ」。笑ってはいたが、目に見えないトゲがくつきりと生えていて、ムツはどきりとした。綾子は「いいじゃん、ちよつとだけだし」、そう言って笑いながら、由美のほうへ手をのばす。

※

そこから、次の声があがるのは早かった。

「うん、見たい見たい」と、だれかが言って、「いいじゃんかー」、「ねー、手どけてみてよ」

佐紀も「だいじょうぶだよ、かわいいってー」と笑いながら言う。ほかの子たちも笑っていた。笑いながら、由美の手をどかさうとした。

「……やめてよ」

由美が消え入りそうな声でつぶやく。でも、だれもその訴えを聴こうとはしない。

いじられ役の由美のことだから、まあこれくらいはだいじょうぶ、そういう余裕がみんなにはあつて、それがさらなるにやにや笑いを促している。ムツは、こくりとつばを飲み込んだ。

飛鳥の、あの肌のことが思い出される。柔い、もも色の肌。あと、ひと突き——とが尖ったくちばしで、もうあとひと突きされたら血が出てきてしまうかもしれない、そういう危うさのある、飛鳥の肌。

いま輪のなかにいる由美のほおも、もも色に上気していた。目も、ずいぶんとうるんでいる。あとひと突きで、その目からあふれ出るものがある——ムツはそう思った瞬間、自分でも知らぬ間に口を開いていた。

「やめなよ」

④ 言っているそばから、言わなきゃよかった、と思っていた。でも、勝手に声が出る。

「いやがつてるよ」

その声は、自分でも気づくくらいにふるえていた。

みんなの視線がムツへと集まる。綾子もじつとこちらを見ていた。ムツは、鼻の奥がつんとなって、顔がじわじわと熱くなっているのを感じる。

⑤ 少しのあいだ沈黙が落ちた。いちばん先に視線を外したのは綾子だった。由美のほうをちらと見遣って、「まあいいや」。そう吐き捨ててから、自分の席へともどっていく。はりつめていた空気は急速にゆるんでいき、ほかの子たちも拍子抜けしたようになって、それぞれの席へと帰っていった。

金しばりにあつたかのように動けなくなっていたムツは、ひとり、席に坐つたまの由美に見られていることに気づいた。その目には、やはり涙が浮かんでいた。ムツはなんだかいたたまれなくなつて、目をそらしてしまう。

〈中略3 放課後、ムツは綾子からの手紙を自分の机の中から見つける。「いい気にならないでよね」と書かれた手紙のことが帰宅後も頭にこびりついて離れない。そんな中、夕食の時間になる。〉

ムツが食卓へ行くと、「あしたは曇りだつて」と、エプロン姿の母さんは答えた。「春はまだ先ね」、いつものように、父さんが先に坐っていた。風呂あがりの湿った空気をまわりに漂わせながら、まるで病院で何時間も待たされている患者のような顔をして、テレビをじつと見つめている。じいちゃんと兄ちゃんたちがどたと音を立てて席に坐っているあいだも、それは変わらない。最後にご飯を盛っていた母さんが自分の席に坐ると、家族そろっていただきます。いつもの流れだ。その言葉とともに父さんがいさぎよくテレビをぶつんと消すと、さあ、我が家では食卓をはさんだゲームが始まる。テーブルの上ののっているのは、ご飯じゃなくてフーセンだ——ムツはいつもそう思っている。

そのフーセンには、ピンとはりつめた空気がこれでもかというくらいに入っている。⑥ ちょっとでもつつけばパン！ と派手な音を立てて割れてしまう。母さんも兄ちゃんたちも、そのはち切れそうなフーセンを見ないように、不用意に割つてしまわないように、無言のまま下だけを見て、まるでにわとりがエサを食べるように静かにご飯を食べる。

でも、何度やつてもこのゲームが成功することはない。フーセンはいつもやぶら

れてしまう。針を刺してしまうのはいつも、じいちゃんだ。⑦ 食卓に坐つたじいちゃんはどうしてか、言わなくてもいいようなことを、ぼそりと口にしてしまう。ちよつと思いついただけ、というようなほんのささいな、どうでもいいことを言うてしまう。

きょうの針は、いちばん上の兄ちゃんに言った「あれ、おめもう来年就職だが」だった。

ムツは身を固くする。兄ちゃんはこの春で高二になったばかりだ。当の兄ちゃんのほうを横目で見てみるが、首を軽くふるだけで、なにも答えようとはしない。父さんがじいちゃんをひとにらみした。

ああ、きょうも見事にフーセンは割れてしまった。ここからは父さんの、のろいの言葉がえんえんと続くことになる。

「なーに言つてらつたが。いま二年にあがつたどござつてのに、就職だど。ボゲでらんでねが、このアル中が。脳縮んでらんでね」

ムツは、その言葉たちなんて気にせずに、ご飯を食べようとする。でも、のどがきゅつと縮こまつて、思ったようにご飯が入っていない。兄ちゃんたちや母さんは平然とご飯を食へ続けているというのに、ムツだけがうまくできない。じいちゃんも、毎晩飲んでいるお酒のコップをにぎりながら、父さんから顔をそらしてご飯を食へ続けている。まるで、父さんの言っている言葉なんて聞こえていないかのようにもくもくと食へ、ぐいぐいと飲む。

もしかしたら、じいちゃんには父さんの言葉なんて聞こえていないのかもしれない。じいちゃんの耳にはたしかに補聴器がつけられているけれど、それが父さんの声をひろっているかどうかは、だれにもわからないのだ。

——聞ぎてものだけ聞けるもの

じいちゃんがそう言っていたことを、ムツはよく覚えている。それに、もしそうなら、じいちゃんはずわざとフーセンを割っている可能性だつてでてる。毎晩父さんを——実の、血のつながった息子を怒らせるようなことを言っていれば、母さんやムツや兄ちゃんたちが、のろいの言葉をかけられないで済む。

頭のなかでそんなことを考えていると、がちやりと音がした。父さんが食べ終えた食器を乱暴にシンクに置いて、割れたフーセンの欠片をふみつけながらいちばん先にゲーム会場から退場していく。あとの食卓には、間のびした空気と冷えたご飯、そして五人の家族だけが残された。兄ちゃんたちはそれぞれ、「おかわり」「おれも」と母さんに言う。

じいちゃんは、きょう三杯目になるお酒を楽しそうに注いでいる。

〈中略4 五月に入り、クラスではムツと由美の距離が以前より近くなっていた。ある日、担任の工藤先生が教室にいたムツを呼び出す。〉

ムツは足早に教室を出た。工藤先生はムツの先をすたすたと歩いていって、空き教室の戸をがらっと開ける。ムツを適当な席に坐らせてから「先生、このあいださ」と、さっそく切り出した。その声はいつもより少しだけかたいような気がして、ムツの胸はどきんと打つ。

「久しぶりに由美の母さんに会って、いろいろ話したんだけどね。三年生の終わりに由美のじんましん、結構ひどくなっちゃったって聞いてさあ」言いながら先生は、銀ぶちめがねのつるを中指でおしあげる。「由美が何日か学校休んだの、睦実も覚えてるかな」

ムツは、まだうるさくしている自分の鼓動を聞きながら、「はい、覚えてます」と、ゆっくり答えた。

あのときは綾子がソフトバレーにハマっていて、昼休みになるとよく由美を連れて体育館へ行っていた。ムツも誘われて何度かやったのだが、返球が少しでもそれると綾子は「ちゃんと返してよ」「下手くそ」などと言うものだから、相手をする由美は一球一球にすごく気をつかっているようだった。

なにしろ、そのころの綾子の口ぐせは、「うちのお母さん、春高（全国規模の高校バレー大会）出たんだから」。体育館から教室に帰るまでのちよつとの廊下でも、「綾子も身長高いから、中学でバレー部入ったらエースかも、って。だから、いまから練習しとかないと」なんてことを言っていた。ただ、そのときの綾子の表情は、となりを歩く由美と同じくらい、切羽（せう）つまっているようにムツには見えた。

「先生ちよつと心配でさ。このあいだも由美はふつか続けて休んでたし」

先生は落ちてもいないめがねのつるをおしあげて言う。ムツのほうを上目づかいに見ながら「で、ここからが相談なんだけど」と、居住まいを正している。

「連休が明けてもうちよつと経ったら、体育でソフトバレーやろうと思ってさ。バレーだから、ふたりひと組で練習する時間も設けるつもりなんだけどね、この一年間はそういうペア組みがあるときは、出席番号順にしようと思ってる」

ここまで聞いて、ああ、そうか、とムツは思う。これはつまり、そういう、ことか。先生の意図に気づいたムツは、ものの上に置いていた手をぎゅつとにぎった。

「睦実ならわかってくれるだろうと思って言ってるんだけどさ、由美のじんましん、やつぱり心配で。由美の母さんも、かなり心配してるみたいだし……」

先生はしきりにめがねに手をやっている。きつと居心地が悪いのだろう。「出席番号順に」と先生が言えば、菊地綾子の相手は小林睦実になる。工藤先生は一年生のときもムツたちの担任だったから、それがどういう意味をもつか、きつとある程度は理解しているのだろう。しどろもどろになるのも無理はない。

⑧ムツはといえば、先生の話に軽く相づちを打ちながらも、頭のなかではあの話を思い出していた。じいちゃんが昔、友だちと一緒にいじめられているにわたりをにがしたことがあった、というあの話。そのとき、代わりに仲間からつき殺されてしまった一羽がいたという。あのとき、じいちゃんたちがした選択は間違っていたのだろうか、ムツはいまでもその答えがわからないでいる。同じように、いま、先生の話に対してもどう感じていいのか、ムツはよくわからない。

ただ、ひとつだけわかっていることもあった。いままでの先生たちは、決してこんな提案はしなかった、ということだ。じんましんとしてあらわれる由美の痛みは、無視されるのが当然だった。ムツだって無視してきたのだ。近くにいたというのに、なにもせずしていた。でも、目の前にいる工藤先生はきつと由美のことを考えて、いまこの話をしている。⑨由美を助けようとしている。

「あの……、どうかな」

先生はおずおずと言った。無理に笑いながら、軽く首をかたむけている。

「わかりました」と、ムツは答えた。「やってみます」

「そっか、そっか」

先生はムツの答えをきくと、すっかり笑顔になった。「いやあ、睦実ならわかってくれると思ってさ。よかったよかった。じゃあ、教室もどろっか」

先生は重荷がおりて気が抜けたのか、ゆるりと立ち上がって、笑顔で話をし続ける。「うちの長女さあ、この春から市外の、ちよつと遠めの高校に通ってるんだけど、由美の姉さんもそこでさあ。入学式ときはそれ知らなかったから、当日由美の母さんにばったり会っちゃって、もうびっくり。世間せまくて笑っちゃうよね。クラスまで同じで……」

先生はそんな話を小声でしながら、ひんやりとした廊下に出る。歩きたびに結った長い髪が左右にゆれていた。ムツは振り子のようなそれを見ながら、頭のなかではまた、死んだにわたりのことを考えていた。

（仲谷実織「小屋のなか」より）

問1 空欄aに入る語を漢字一字で答えなさい。

問2 傍線部①「佐紀はそのことについて、決してふれようとはしない」のはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 由美のじんましの理由の一つには自分の行動もあるが、それを口にすれば自分が次の標的になる可能性があり、話題にしたくはないから。

イ 由美が休んだときの綾子の行動は気になるが、そのことについて話せばムツと自分の関係が壊れてしまう恐れがあり、それは避けたいから。

ウ 由美が休むとつらい立場に置かれてしまうことにムツ本人は気づいていないが、今わざわざ口に出して意識させる必要はないと気づかっているから。

エ 由美の欠席理由が偽りだとわかってはいるが、束縛してくる綾子からなんとか距離を置こうとする由美の必死な気持ちを無駄にはするまいと思っているから。

問3 傍線部②「そう答えたときの――」と思ったのだった」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「年をとるのも悪くない」とムツが思った理由について最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 耳の聞こえが悪くなつて不自由そうだった「じいちゃん」が、実は耳栓の代わりに補聴器を使っているだけだと知り安心したから。

イ 年をとって補聴器の操作も難しくなっていると思っていた「じいちゃん」が、難なく電源を切りかえていることにほっとしたから。

ウ 年を重ねてきただけあって、「じいちゃん」の発想にはしたたかな知恵が感じられ、自分には思いもつかなかった発想にとても感心したから。

エ 家族に心配をかけまいと、つらいことでも明るく答える「じいちゃん」の様子に、年長者ならではの余裕が感じられてあこがれを抱いたから。

(2) その後ムツは「じいちゃん」のある行動を見て、傍線部②中の「そう答えたときのじいちゃん」を思い出します。その行動を描いた連続する二文を(中略3)以降の本文中から抜き出し、始めの八字を答えなさい。

問4 次は、はじめについて書かれた文章の引用です。引用中に「内なる鬱憤^{うっぴん}」とありますが、傍線部③中の「綾子」も「内なる鬱憤」を以前から抱えています。そのことが描かれている形式段落を(中略4)以降の本文中から抜き出し、始めの五字を答えなさい。

何が憎らしくて、そんなに友だちをいじめるのだろう。大人の心理から想像しても、さほど違ったことではないはずだ。何か内なる鬱憤^{うっぴん}を晴らしたいのである。

(池田晶子「人間自身 考えることに終わりなく」(新潮社) 所収「いじめの憂鬱」より部分)

問5 ※部分「そこから――聴こうとはしない。」について、由美に対するこれらの言動が起きた要因を最も端的に表す言葉を、一の2ページ下段の本文中から四字で抜き出し、答えなさい。

問6 傍線部④について、「言わなきゃよかった」とムツが思ったのはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 負けん気の強い綾子に注意をすれば、すぐに屁理屈^{へりくつ}で言い返され、けんかになるに決まっているから。

イ 影響力のある綾子にいらまされれば、今度は自分がいじめられるだろうことが容易に想像できるから。

ウ 綾子を傷つけると、自慢^{まん}の娘がいじめられたと綾子の母親が文句を言うことになることは確実だから。

エ クラスの中心である綾子の機嫌を損ねると、かばったはずの由美への嫌がらせがかえってひどくなるから。

問7 傍線部⑤「少しのあいだ沈黙が落ちた」という表現の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「沈」と「落」がともに下方へ向かうイメージを持つ字であることから、由美をからかい笑っていた軽薄な雰囲気が一転して、重苦しい緊張感のあるものへと変化したことがわかる。

イ「落ちた」という表現からは、落下したものが地面で反発して跳ね返る様子がイメージされることから、綾子たちのからかいの対象が由美からムツへと移っていくことを想像させる。

ウ「沈黙が落ちた」と「沈黙」を主語にすることで、ムツや由美の意図とは関係なく、人間を超えたものの力がこの場の雰囲気を支配し、容易には変えられないものになっていることが読み取れる。

エ「少しのあいだ」という表現からは、この場の沈黙が決して長く続くものではなく一時的なものであり、すぐにつきままでの騒々しい教室の雰囲気に戻ってしまうということが予想される。

問8 傍線部⑥「ちよつとでもつつけばパン！と派手な音を立てて割れてしまふ」のような危険な状態を「(ア) 触(イ) 発」といいます。空欄ア・イに入る最も適切な漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問9 傍線部⑦「食卓に坐った――口にしてしまふ」について、「じいちゃん」がそのようなことをするわけをムツはどう考えていますか。その考えがわかる最も適切な一文を本文中から抜き出し、始めの五字を答えなさい。

問10 次は、傍線部⑧「ムツはといえば――思い出していた」以降の内容について説明した文章です。これを読み、後の各問いに答えなさい。

「じいちゃん」たちは、昔、あるにわとりを救ったが、結局別のにわとりが（ア 十四字）てしまったという。そのことをムツは思い出し、由美が守られることで、次は自分が「X」かもしれないと考えた。いろいろと思いをめぐらせたあげく、先生の提案を受け入れたあとでも、ムツの心にはこの先の展開に対するさまざまな思いが入り交じっている。例えば、「（イ 七字）」という表現には不安な気持ちだが、「（ウ 七字）」という表現には自分が「X」可能性を恐れる気持ちが、象徴的に表されていると読み取れる。

(1) 空欄ア・エに入る最も適切な表現を本文中から指定の字数で抜き出し、答えなさい。ただし、ア・エについては始めと終わりの三字を答えること。

(2) 空欄Xに入る適切な表現を考え、ひらがな六字で答えなさい。

問11 傍線部⑨「由美を助けようとしている」とムツは受け止めています。が、「じいちゃん」に言わせると、工藤先生の提案はどのような行為だと言えますか。「」の行為」に続く形で〈中略1〉以降〈中略2〉以前の本文中から六字で抜き出し、答えなさい。

問12 本文の説明として適切でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア ムツをはじめとした、さまざまな登場人物の視点からできごとの意味をとらえ、現代社会において円満な人間関係を営むことの困難さを多面的に描き出している。

イ「小屋のなか」という題名には、にわとりだけでなく、学校や家庭、地域といった閉ざされた空間で過ごす人間もまた「小屋のなか」にいたことが示されている。

ウ ムツたちこども社会のいじめのありようは、大人を含む大きな社会のありようと重なっていることを示し、大人が抱える弱さや未熟さもありのままに描いている。

エ「さあ、我が家では食卓をはさんだゲームが始まる」（8ページ上段）のような一歩引いた視点からとらえた表現によって、状況を客観的に受け止めようとするムツの姿を描き出している。

オ 工藤先生はこれまでの先生たちとはちがいが、いじめを受けている由美のことを助けたい一心でムツに綾子とのペア組みの提案をした、生徒思いの先生として描かれている。

※	※	※	※	※	※
---	---	---	---	---	---

問 11	問 10					問 7	問 4	問 3	問 1	二
	(2)	(1)						(1)		
	X	エ	ウ	イ	ア			(2)		
の行為										
問 12										

※	※	※	※	※
---	---	---	---	---

問 11	問 10		問 9	問 6	問 3	問 1	一				
(1)	(2)	(1)									
		ア									
		を扱う能力		イ							
(2)											
		ウ									
(3)											
		エ									

国語

解答用紙

受験番号

得点
※